10/15/2001

＊キリスト教学特殊講義＊＊＊＊＊＊＊　S.Ashina

第一章：文化から自然へ

第二章：自然神学の諸問題

序：キリスト教思想と自然の問い－アインシュタインの宗教論を手がかりに－

第三章：キリスト教思想と環境倫理

第四章：近代科学とキリスト教

1：近代キリスト教の歴史的状況

2：神学者ニュートンと自然神学

3：ニュートン主義と理神論

4：キリスト教の合理性をめぐって

１：近代キリスト教の歴史的状況

１－１：宗教改革と近代キリスト教

1．西洋世界における「近代」とは

古プロテスタンティズム(Altprotestantismus)と新プロテスタンティズム(Neuprotestantismus)の区別

2．　それゆえ、次のことは驚くに足らない。つまり、両プロテスタンティズム（ルター派とカルヴァン派：論者補足）は対抗宗教改革と同様に、あるいはそれにも増して、完全に変貌した世界のただなかにおける中世の遅れ咲きを意味しているのである。……宗教改革は成功したが、しかしそれは市民的な中世末期の宗教改革だったのである。……ここで我々の眼前に立っているのは、内面化され個人化され市民化され、その宗教的深みにおいて、最高の信仰と熱狂にまで新たに突き動かされた中世末期なのである(Troeltsch[GS.4]　,S.214f.)。

教会史全体が１８世紀を期して新しい諸条件の下に突入し、近代的思惟の自立と国教会的な生の統一の崩壊の結果、それ以来全般的に、教会史は統一的で完結した対象をもはや自らの前に持つことがなくなった。それと同様に、キリスト教の諸派の社会哲学もまた、見通しがたい分散と絶えず交代する依存性の下にあるのである。キリスト教諸派の活動する基盤は新たになった。それは、近代の市民的－資本主義的な社会と官僚的な軍事国家という基盤である（Troeltsch[GS.1]，S.965）

3．　近代神学史とその発展過程を宗教戦争の時代の終わりの状況と関連づけたことは、エマヌエル・ヒルシュが彼の神学史においてなした功績である。……寛容の思想は１６世紀と１７世紀の恐ろしい信仰戦争の終局において戦い合った諸教派の全キリスト教的主張が挫折したことによって初めて広まった。この戦争がおおむね妥協によって終わったのち、キリスト教と社会との関係における新しい状況が事実上成立したのである(Pannenberg[1997]，S.25)

4.　しかし、もし完全に新しい要素が出現しなかったとすれば、これらすべてのことは真に新しい文化を創造しなかったであろう。この新しい要素は科学の中に存しているのである。科学は神学や宗教に代わって、主導権を引き継いだのであって、それまで続いてきた宗教的時代に対し、その信奉者たちによって、科学的そして実証的時代として賞賛された時代が始まったのである。この賞賛は今も続いている(ibid., S.603)

5. イデオロギーとしての科学

新しい科学に即応する自然神学の構築＝キリスト教思想と新しい科学（公共的知）とのコミュニケーションを可能にする共通基盤

1－2：近代イギリスの思想状況

6. 16世紀から18世紀にかけてのキリスト

新しい歴史的状況の中で出現し合理的論理によって武装した無神論を、まさにそれと同程度の合理的論理の水準において論駁すること

新しい社会システムの形成期（システム変動の時代）

7. 共和主義とも結びついた千年王国論的な霊的熱狂運動

8. 広教主義（latitudinarianism）、ニュートン主義の社会的機能

2：神学者ニュートンと自然神学

2－1：ニュートンの思想世界と神

（1）『プリンキピア』の自然哲学と神学

9.　我々が適切な注意を払わねばならない事実は、物理学や数学の諸問題は17世紀のたいていの人々にとって最大の関心事ではなかったし、またそれらはニュートン自身にとっても最大の関心事ではなかったことである。ニュートンは錬金術、教会史、神学、預言、古代哲学、そして「古代王国の年代誌」により多くの時間を費やしたのである(Dobbs&Jacob[1995] p.7])

10. この至高の存在者は、宇宙霊魂(anima mundi)としてではなく万物の主(universorum dominus)としてあらゆる事物を統治する。そしてその支配のゆえに、主なる神(dominus deus)、パントクラトール（Παντοκρατωρ）と呼ばれるのが常である。というのも、神とは相対的な呼び名であって、それは僕(servus)に関連しているからである。そして神性とは、神を宇宙霊魂とする者が夢想するような、神の支配が神自身の身体におよぶことではなく、僕におよぶことだからである(Newton[Principia], p.760)

11.『プリンキピア』の神学

①パントクラトールあるいは主という言葉遣い、あるいは神の統治や支配の強調

宗教改革者における神の絶対的主権の思想との類似性、中世後期の唯名論・主意主義との関わりが指摘されている（Deason[1986], p.170）。

②無神論論駁のための神の存在論証

伝統的な自然神学における「意図からの神の存在論証」を継承。自らの新しい科学的知見に基礎づけられた神の存在論証によって無神論を反駁するという企て

③自然哲学とその神学的根拠

「確かにわれわれは実験に反して空しく夢想に耽ってはならないが、自然の類比(analogia nat

urae)から離れてもいけない。なぜなら、自然は単純(simplex)であり、常にそれ自身と一致しているからである」(Newton[Principia] p.553)

「この太陽、惑星、彗星の壮麗きわまりない体系は知性的で力ある存在の思慮と支配から発した以外には考えることができない」(ibid.:p.760)

(2) ボイル・レクチャーの自然神学

12.リチャード・ベントリー『世界の起源と枠組みからの無神論論駁』

13 .人間本性の価値に過度の評価を与えることなしに、我々は有徳で宗教的な人間の魂が太陽やその惑星や世界のすべての星よりも大きな価値があり卓越性を有することを肯定できるかもしれない(Bentley[1693], p.356)

天体がこのようなすばらしい物体の力ある制作者そして統治者という偉大な観念とそれに対する崇拝とを我々の内に生み出し、我々の心を刺激してその存在者に対する敬愛と讃美へと高めるということを、もし諸君が語るとすれば、諸君はまさに真実かつ適切に語っているのである(ibid.:p.357)

14. 我々は次のように合理的に結論づけることができるであろう。つまり、現在の組織(世界システムの)は物質的原因の必然性や想像上の偶然という目的のない混乱から生じたものではなく、知性的で善なる存在者から生じたのであり、この存在者は現在の組織を選択と意図(design)によって特定の仕方で形成したのである (ibid.:p.361)

15. このような詩(ヴェルギリウスのアイネーイス:論者補足)が永遠的であり、最初の作者も原文もなしにコピーからコピーへと転写されてきたことなどまったく信じがたいことであるように、人間の身体の組織が……最初の親とその創造者なしに父から息子へと伝えられ転写されてきたとは同様に信じがたい(ibid.:p.394)

16.ベントリーの議論のポイント

①「世界システムに発見されたみごとな秩序と美」→「偶然性や機械論的因果性といった無神論的な説明方法の排除」→「残る説明可能性としての神」

②「意図からの論証」という神の存在論証

17.クラークの「ア・プリオリな神の存在論証」

ア・ポステリオリな論証は、実際もっとも一般的で有用な論証であり、もっとも理解しやすく、すべての理解力の人にとって多少とも相応しいものである。それゆえ、この論証は常に他と区別して強調されねばならない。しかし、無神論者はしばしばア・プリオリな論証以外の仕方では排除され得ないような形而上学的推論によって神の存在と属性に反対するのであるから、論証のこのような仕方もまた、その固有の場においては、有用かつ必要なのである。神の永遠性は、必然的で自存的な原因の本性をア・プリオリに理解する以外の仕方では証明することができない(Clarke[1704(1998)], p.119)

18. 同様にすべての植物、動物、惑星はあるべき場所を持っており、人間はその天職に従事するならば、社会の中に予定された不変の場所を有するのである。天体の静穏、平静は国家における静穏、平静と似ている(Jacob[1976], p.63)

秩序を与える神、宇宙の支配者という考えは、教会の政治的社会的教説の基礎となった。神の摂理は実在のすべての局面において作用している。自然の秩序においてまた人間的事柄の世界において、人間は自然法則を動かし人間的事柄を方向付ける神の保持的摂理を観察することができる(ibid.:p.96)

＜文献表＞

芦名[1999]：芦名定道　「キリスト教と近代自然科学 ── ニュートンとニュートン主義を中心に ──」『京都大学文学部研究紀要』第三十八号　京都大学文学部　一九九九年　pp. 147-244

[2000]：芦名定道　『近代科学の成立と自然神学の関係をめぐって ── ニュートン主義の神学的受容を中心に ──』(平成１０・１１年度文部省科学研究費補助金 (基盤研究(C) (2))研究成果報告書)

Bentley[1693]：Richard Bentley, A Confutation of Atheism from the Origin and Frame of the World., in: I. Bernard Cohen (ed.), *Isaac Newton's Papers & Letters on Natural Philosophy and related documents*, Harverd Univ. Press　1958

Clarke[1704(1998)]　：Samuel Clarke, *A Demonstration of the Being and Attributes of God and Other Writings* (de. by Ezio Vailati), Cambridge University Press

Deason[1986]：Gary B. Deason, Reformation Theology and the Mechanistic Conception, in: Lindberg/Numbers[1986]

Force/Popkin[1999]：James E. Force and Richard H. Popkin (ed.), *Newton and Religion. Context, Nature, and Influence*, Kluwer Academic Publishers　1999

浜林[1987]：浜林正夫　『イギリス宗教史』(大月書店)

Higgins-Biddle[1999]　：John C. Higgins-Biddle, introduction, in: Locke[1695(1999)]

Hume[1779(1993)]：David Hume, *Principal Writings on Religion including Dialogues Concerning Natural Reliigon and The Natural History of Religion* (Edited with an Introduction by J.C.A.Gaskin), Oxford Univ. Press

Jacob[1976]：Margaret C. Jacob, *The Newtonians and the English Revolution 1689-1720*, Gordon and Breach

[1986]：*Christianity and the Newtonian Worldview*, in: Lindberg/Numbers[1986]

[1997]：*Scientific Culture and the Making of the Industrial West*, Oxford Univ. Press

Dobbs&Jacob[1995]：Betty Jo Teeter Dobbs and Margaret C. Jacob, *Newton and the Culture of Newtonianism*, Humanities Press

Koyré[1957(1982)]：Alexandre Koyré, *From the Closed World To the Infinite Universe*, The Johns Hopkins Univ. Press

Lindberg/Numbers[1986]：David C. Lindberg and Ronald L. Numbers(ed.), *God & Nature. Historical Essays on the Encounter between Christianity and Science*, Unv. of California Press

Locke[1690]：John Locke, *An Essays concerning Human Understanding* (Ed. by Peter H. Niddith), Clarendon Press　1975

[1695(1999)] ：John Locke, *The Reasonableness of Christianity as delivered in the Scriptures* (ed. by John C. Higgins-Bibble), Clarendon Press 1999

Manuel[1974]：Frank E. Manuel, *The Religion of Isaac Newton. The Fremantle Lecture 1973*, The Clarendon Press

松山[1997]：松山壽一 『ニュートンとカント 力と物質の自然哲学』(晃洋書房)

Newton[1692]：Letter I. To the Reverend Dr. Richard Bentley. Decemb.10,1692, in:I. Bernard Cohen (ed.), *Isaac Newton's Paper & Letters on Natural Philosophy and related documents*, Harverd Univ. Press 1958

[1693]：Letter IV. To Mr. Bentley, in: ibid.

[Principia]：Alexandre Koyré and I.Bernard Cohen (ed.), *Isaac Newton's Philosophiae Naturalis Principia Mathematica. The Third Edition (1726) with variant readings. Volume II*, Cambridge at the Univ. Press 1972

[MS.Add.4003]：De Gravitatione et aequipondio fluidorum, in: A. Rupert Hall and Marie Boas Hall (ed.), *Unpublished Scientific Papers of Isaac Newton. A selection from the Portsmouth Collection in the Univ. Library*, Cambridge Univ. Press 1962(1978)

[1733]：*Observations upon the Prophecies of Daniel, and the Apocalypse of John*, London, reprinted by the Oregon Institute of Science and Medicine 1991

野田[1985]: 野田又夫 『ロック』(講談社)

Pannenberg[1997]: Wolfhart Pannenberg, *Problemgeschichte der neueren evangelischen Theologie in Deutschland. Von Scheleiermacher bis zu Barth und Tillich,* Vandenhoeck & Ruprecht

Schmidt[1957(1986)]：M. Schmidt, Art., Broad Church Party, in: *Die Religion in Geschichte und Gegenwart. 3 Auflage Erster Band*, J.C.B.Mohr

Toland[1696]：John Toland, *Christianity not Mysterious*, in: *History of British Deism 8 Volumes* Routledge / Thoemmes Press 1995

Tillich[1919]：Rechtfertigung und Zweifel (1. und 2. Version), in: *Paul Tillich. Ergänzungs und Nachlaßbände zu den Gesammelte Werke* , *Band X*, De Gruyter 1999, S.127-230

Troeltsch[1906(1922)]：Ernst Troeltsch, Protestantisches Christentum und Kirche in der Neuzeit, in: Paul Hinneberg (hrsg.), *Die Kultur der Gegenwart. Ihre Entwicklnug und ihre Ziele*, Leipzig

[GS]：*Gesammelte Schriften.1-4*. Aalen 1912-1925 (1977-1981) Scientia Verlag 1925(1981)

Westfall[1980]：Richard S. Westfall, *Never at Rest. A Biography of Isaac Newton*, Cambridge Univ. Press